PROSPORTS KEIRIN WEEKLY MAGAZINE

プロスポーツ

第63回 朝日新聞社杯 競輪祭 号外版

記者のイチ押し！

CYCLE JKA Social Action 競輪とオートレースの補助事業

競輪とオートレースの売り上げの一部は、
機械工業の振興や社会福祉等に役立てられています。

小山 記者

野原 雅也

太田・竜馬

寛仁親王牌で初めてG1決勝の舞台を戦った野原雅也。単騎のレースでなかったが、良い経験になった。もう少しありましたね。レース後に（近畿の先輩から）アドバイスを貰った」と着実にステップアップをして、得たものは大きい。自力のタテ攻撃に加えて、初日の特別選抜予選でも見せたように、強気にヨコの動きもこなせるし、器用な競走ができるのが強み。前回G1の活躍を見れば、競輪祭でも縦横無尽な立ち回りに期待。

太田竜馬は寛仁親王牌の2日目ローズカップで新田祐大を追走。新田が上がり10秒7で8番手まくりを決め、太田の個人上がりは10秒6だった。「新田さんの後ろが一番いいかなと。（新田の）踏み出しがすごくて、一瞬、口が空いた」とワールドクラスのスピードを体感したことで得たこともあるだろう。準決は合わせ切る平原康多の力強さに敗れたが、まくったスピードは迫力があった。18年にG1で唯一決勝に乗った小倉でこそ持ち味のスピードが生きる。

竹内 記者

岩本 俊介

阿部 力也

内面の迷いがそのまま走りに出てしまったような、岩本俊介の寛仁親王牌だった。

「展開待ちみたいなレースをやってると、このままダラダラ（下降線をたどって）いっちゃうんじゃないかっていう思いがある。やっぱり自分はレースを支配して走っていく方が、得意なんですよね」と、原点に回帰。37歳という年齢を意識しながら、「チャレンジする気持ちがもてる最終章」とも語っていた。四日市記念の一次予選での逃げ切りで、本来の走りにスイッチが入った様子。迷いを断ち切った岩本の胸のすくような積極策に期待したい。

阿部力也は差し脚が冴えている。直近は1の2場所で4勝の固め打ち。前回の弥彦では北日本ラインの3番手。番手まくりに出た飯野祐太がのみ込まれると、さばいて直線強襲で優勝にこぎつけた。オールスターの準決では新田祐大、守澤太志の3番手も古性優作にその位置を奪われ、G1の厳しさを味わった。その経験を糧に競輪祭は、初めてのG1ファイナルを見据える。

細川 記者

小川 勇介

吉田 拓矢

「久々の競輪祭なので気合を入れます」と18年以来の地元ビッグ参戦に自らを奮い立たせる小川勇介。「前回出た時も6日制のナイターでポイント制も経験している。その時は二次予選まで行けたので今年はその上を目指したい」と目指すは準決の舞台。「良い頃の伸びる感覚が戻ってきたし、セッティングに迷いもなくなった。あとは後方に置かれてしまったときのコース取りが課題。地区プロもあるけどしっかり調整します」と確かな手応えを手に大舞台に備える。

「寛仁親王牌は悪くなかったですけど、もっと良くなるようにと思ってハンドル周りを変えたけどダメでした」と防府記念では準決で敗退し未勝利に終わった吉田拓矢だが試行錯誤して挑んだ結果。「体の感じは良いのであとは自転車とのマッチング。自転車も含めてセッティングを煮詰めたい」。高松宮記念杯、寛仁親王牌と番手選手の優勝に貢献しており、ビッグ戦線でも存在感を高めている。賞金ランク10位と初のグランプリを狙える位置で集中力を研ぎ澄ませる。

権田 記者

木暮 安由

石原 颯

「だんだんかみ合うようになってきた」と、近況に手応えを感じている木暮安由が、ようやくG1仕様のデキになってきた。昨年の後半から今年の前半にかけては不振を極めたが、10月の寛仁親王牌では久々にG1の準決まで進んだ。G1優出が通算9回と、元来がタイトルに手が届く存在だった。それだけに状態さえ戻ってくれば、この舞台で引けを取ることはない。ましてや競輪祭は14、17、19年と3度決勝を経験している相性のいい大会。一昨年以来のG1ファイナルがあっても不思議はない。

石原颯は9月の共同通信社杯で落車に見舞われて鎖骨を骨折した。寛仁親王牌で復帰したが、「いきなりG1で通用するとは思ってない」と、⑦⑨⑦③着の成績もある程度は織り込み済みだっただろう。2度目のG1では苦汁をなめた。そこから1カ月近く空いた余裕のローテで競輪祭を迎える。寛仁親王牌から上積みも見込める今年最後のG1。石原が存在感を放つ走りをして、ヤンググランプリにつなげてほしい。

GIRL'S KEIRIN ガールズグランプリ2021 トライアルレース

11/18~20

トパーズ（トライアルA）

充実ぶりが際立つ石井寛子の名前が光るが、一発勝負に賭ける地元の小林優香の逆転に期待したい。五輪が終わった8月から走り始めて10月終了時までに12勝、2着2回で全く連を外していない。ガールズの世界に戻ってきた以上、目指すのはグランプリに出て優勝することのみだ。強敵相手にも男子選手顔負けの快速を発揮し、勝ってまずは出場権を手にする。

もちろん、石井寛を狙う手も。今年の石井寛は充実した練習をこなす中で10月までに68勝し22V。前々好位からのタテ脚勝負という自分のレースに絶大な自信を持っている。グランプリ出場へ賞金ランクでボーダーにいる高木真備、鈴木美教も勝負駆け。ともに近況は良好で、ここに照準を絞って態勢を整えている。コツコツと結果を残してグランプリ出場が濃厚な坂口楓華、勝負強い梅川風子も一発あっていい。

アメジスト（トライアルB）

女王・児玉碧衣が、昨年大会と同様に緩めず勝利のみを追求する。常勝を義務付けられる中でモチベーションが薄れた時期もあったが、未勝利に終わったガールズケイリンフェスティバルの屈辱で闘志に火が付いた。以後はガールズドリームを含めて22戦負けなし。現時点で唯一の不安は腰痛が出たケースのみ。ナショナルチームメンバーをも凌駕するダッシュ、スピードで地元G1の前半戦を盛り上げる。

デビュー1年半でグランプリ出場が見えた尾方真生。思い切ったレースが目立っており、姉弟子の児玉との差が縮まったことを実感できるような快走をしたい。今年はグランプリに戻ってくることが確実な小林莉子、キャリアハイともいえる活躍が光る荒牧聖未らも存在感を示す。柳原真緒、大久保花梨、久米詩、尾崎睦、太田美穂まで横一線で、どこまで児玉に迫れるか。